

日韓両語の受動文における 能動文への変換について

—「有情物が無情物にVサレル」文型を対象に—

林 憲 燦

1. はじめに

日韓両語において、同じ知的意味を有する能動文と受動文の選択的使用は、話し手が行為・作用を行なう主体、即ち行為者（以下X）に視点を置いて出来事を表現すれば能動文となり、行為・作用を被る主体、即ち被行為者（以下Y）に視点を置いて出来事を表現すれば受動文になると言えよう。このように能動文と受動文の間には、話し手の視点の問題が常に絡んでくると言える。日本語（以下J）においても韓国語（以下K）においても、話し手は常に行為を行なう側（X）に視点を置きやすく、行為を被る側（Y）に視点を置きにくいので、一般的に能動文は無標で受動文の方が有標なのである。しかし、関与者YとXが「有情物：無情物」の関係にあれば、XよりYの方が優勢であるため、話者はYに視点を置きやすい。奥津（1983）と井上（1989）も、「日本語では無生名詞主語の他動詞能動文はあまり好まれないので、能動文より受動文の方が好まれる」としている。

2. 研究の目的と方法

何れにせよ、視点の原理という一般論の見地からヴォイスを考えてみた場合、関与者YとXが「有情物：無情物」の関係にある受動文は、基本的に能動文への変換が可能であるはずである。が、実際には能動文への変換が出来ない受動文も存在すると共に、尚且つ能動文への変換可能の有無について、J K両語は大きく異なっていると考えられる。

そこで、本稿は関与者YとXが「有情物：無情物」の関係にある受動文を対象に、能動文への変換が可能である場合、不可能である場合、特殊である場合はそれぞれどんな条件の時なのかをXとYの関係、述語動詞の意味との関係から、明らかにするとともにその目的がある。その際、考察の主眼は述語動詞の意味、XのYへの働き掛け性の有無の問題であるが、それ以外の要素についても考慮した。これまでJ Kにおける受動文は、統語論的にも意味論的にも常に能動文との対応関係でしか説明されず、議論されて来たと言っても過言ではない。しかし、受動文から能動文への転換を考慮しないのは、手続き上、明らかな欠陥で、受動文の独自の意味用法の存在の可能性を無視しかねない危険性がある。

以下の各節の見出しは、Kを基準に行なったものであり、これから議論する受動文はJ

K共に直接受動文を考察の対象とする。それは、その受動文に直接対応する能動文があるのはJ K共に直接受動文に限ることと、間接受動文には直接対応するKの文が存在しないからである。また、Kの受身形の認定については学者間に議論があるが、本稿では被動の接尾辞 ‘i/hi/li/ki’ によって形成されるもの、被動の助動詞 ‘a/e cita’ によって作られるもの、被動の意味 ‘toyta/tanghata/patta’ を持つ動詞を補助動詞とするものを受身形として扱う。なお、以下におけるローマ字表記はThe Yale System of Romanizationに基づいて、ハングル（韓国語）を転写したものである。

3. 能動文への変換が不可能である場合

視点がYに固定されているので、Xに視点を置いて能動文で表現することが出来ない。このような受動文専用の表現は、XのYへの働き掛け性が考えにくく、擬人化が不可能な場合である。なお、XをマークするのはJでは「ニ」、KではXが無情物の時しか用いられない ‘ey’ に限られる。

3-1. Xが働き掛け性を持たない原因・理由：Jでは慣用的な表現になっている。

1)彼は時間に追われた。 kunun 時間ey ccochkiessta.

2)彼はその話に気を取られた。 kunun ku iyakiey 精神ul ppayaskiessta.

3)彼は自分の存在を確認したいという衝動に駆られた。

kunun 自身uy 存在lul 確認hako siphun 衝動ey molliessa.

1)’ *時間が彼を追った。 *時間i kulul ccochassta.

2)’ *その話が彼の気を取った。 *ku iyakika kuuy 精神ul ppayasassta.

3)’ *自分の存在を確認したいという衝動が彼を駆った。

*自身uy 存在lul 確認hako siphun 衝動i kulul molassta.

これらの例文の述語には「追う／ccohta, 取る／ppayasta, 駆る／molta」等のような動作動詞が用いられているが、1)～3)のように受動文になると、Yの精神的な状態を表わす動詞にその知的意味が変わる。また、Xは何れも無情物であり、XはYにとって“原因・理由”となっているが、Xの行為・作用によってYが何らかの精神的な影響を被っていると判断出来ない。従って、XはYに働き掛けるものではなく、Y自身の心の内的な動きを表わすものであると言えよう。このように、述語動詞が動作動詞であるのに、XのYへの働き掛け性が考えにくい場合、KではXに視点を置いて能動文で表現することが出来ない。なぜなら、働き掛け性がないものを擬人化させ、Xがまるで意志を持ってYに働き掛けたような表現が出来ないからであろう。一方、JではKと同様な説明も可能であるが、「時間に追われる」「気を取られる」「衝動に駆られる」が慣用的な表現になっているため、受動文専用になっていて、能動文が欠落している。このように、Xと受動動詞が慣用表現になっている場合、JではXを主語とする能動文は考えられない。

3-2. Xが働き掛け性を持たない材料・道具

- 4) 兎が毘にはめられた。 thokkika techey kelliesssta.
- 5) 彼が手足を縄で縛られた。 kuka sonpalul pascwuley mwukkiessta.
- 6) 花子が痴漢のナイフに刺された。 花子ka 痴漢uy khaley ccilliessta.
- 4)' *毘が兎をはめた。 *techi thokkilul kelessta.
- 5)' *縄が彼の手足を縛った。 *pascwuli kuuy sonpalul mwukkessta.
- 6)' *痴漢のナイフが花子を刺した。 *痴漢uy khali 花子lul ccillessta.

これらの例文でも、「はめる／kelta, 縛る／mwukhta, 刺す／cciluta」等のような動詞は動作動詞であり、無情物XはYにとって“材料・道具”となっているが、Xの行為・作用によってYが何らかの物理的な影響を被っているとは判断できないため、XのYへの働き掛け性は考えにくい。従って、J K共にXに視点を与え能動文で表現すると、Xがまるで意志を持ってYに働き掛けたことになるため、文自体が成立しないことになる。なぜなら、J K共に本来Yへの働き掛け性が考えにくいものに働き掛け性があるように捉え、擬人法で表現することが出来ないからであろう。

ところが、XがYにとって同じ材料・道具であっても、次のようにXのYへの働き掛け性が考えられるものは、Xに視点を置いて能動文で表現することが出来る。

- 7) 彼がトラックにはねられた。 kuka thulekey chiessta.
- 8) 捕虜達が軍用車に乗せられていった。 捕虜tuli 軍用車ey sillie nakassta.
- 9) 花子は毎日新聞に掲載された。 花子nun 毎日新聞ey 掲載toyessta.
- 10) 太郎が車の埃に包まれた。 太郎ka 車menciey whipssaiessta.
- 7)' トラックが彼をはねた。 thuleki kulul chiessta.
- 8)' 軍用車が捕虜たちを乗せていった。 軍用車ka 捕虜tulul sille nakassta.
- 9)' 毎日新聞が花子を掲載した。 毎日新聞i 花子lul 掲載hayssta.
- 10)' 車の埃が太郎を包んだ。 車mencika 太郎lul whipssassta.

結局、述語には動作動詞が用いられているが、XのYへの働き掛け性が考えにくいものはXに視点を与え能動文で表現することが不可能であるが、XのYへの働き掛け性が考えられるものは擬人化が可能であるため、Xに視点を与え能動文で表現することが可能である。但し、10)の「車の埃／車menci」は車が過ぎ去った後で立ち上がる埃を指している。

ところで、KではXのYへの働き掛け性を持つ材料・道具であっても、慣用表現になっている場合、Xに視点を与え能動文で表現することが出来ない。

- 11) 彼女が呪文に掛かった。 kunyeka 呪文ey kelliesssta.
- 12) 彼がその飲食に飽き飽きした。 kuka ku 飲食ey mwulliessta.
- 13) 彼女がお金に売れて(つられて)いった。 kuyecaka toney phallie kassta.
- 11)' *呪文i kunyelul kelessta.
- 12)' *ku 飲食i kulul mwulessta.

13)' *toni kuyecalul phala kassta.

これらの例文の述語には動作動詞が用いられており、XのYへの働き掛け性が考えられるが、Kでは「Xと述語動詞」が慣用的な表現になっているため、受動文専用表現になっていて能動文が欠落している。従って、視点は常にYに固定されている。一方、Jでは何れも自動詞文が対応しているので、考察の対象にならない。

3-3. Xが働き掛け性を持たない場所

14)猫がドアに挟まれた。 koyangika mwuney kkiiessta.

15)花子が電車のドアに挟まれた。 花子ka 電車mwuney kkiiessta.

16)太郎がその集まりに仲間入りした。 太郎ika kumoimey kkiiessta.

17)彼女がその集団に混じった。 kunyeka ku mwuliey sekkiiessta.

18)犯人が群衆の中に混じり探すことが出来なかった。

犯人i 群衆sokey sekkiie chaculswuka epsessta.

14)' ドアが猫を挟んだ。 *mwuni koyangilul kkiessta.

15)' 電車のドアが花子を挟んだ。 *電車mwuni 花子lul kkiessta.

16)' *ku moimi 太郎ilul kkiessta.

17)' *ku mwulika kunyelul sekkessta.

18)' *群衆soki 犯人ul sekke chaculswuka epsessta.

これらの例文も、述語には「挟む／kkita, 混ぜる／sekkta」という動作動詞が用いられているが、Kでは受身形になると場所性が生じてくる。つまり、これらのXはYが挟まれ・混ぜられた“場所”を表わしている。このように、能動動詞から受動動詞へ変わるとXの場所性が生じてくる場合、KではXに視点を置いて能動文で表現出来ない。それは、Xが働き掛け性を持たない場所として認識しているからであろう。一方、Jでは14)' 15)'のように、無情物のXがYに働き掛けたと考えられる場合、Xが場所性を持っていても、能動文への変換は可能となる。この時、14)'のXは常に人が開けるものだと考えるため、少し違和感を感じるが文としては成立する。これに対し、15)'のXは自動ドアであって、しかも勝手に動くものだと認識しているため、違和感を感じない。このように、14)' 15)'のXは実生活上で捉える認識の尺度が少し異なるものの、何れもYへの働き掛け性は考えられる。また、16)~18)の例文は受動文自体が成立しないため、考察の対象にならない。以上のことから、XのYへの働き掛け性があるかないかという認知上の問題において、J K両語は異なっていると言えよう。

3-4. Xが働き掛け性を持たない手段

19)学生は校則に縛られている。 學生un 校則ey mwukkie issta.

20)四人家族が父親の能力に縋り付いた。

ney sikkwuka apociuy 能力ey maytalliessta.

21) A君は学生運動に巻き込まれた。 A君i 學生運動ey hwimalliessta.

22) その選手は相手選手の技に終始一貫押された。

ku選手nun sangtay選手uy kilyangey 始終一貫 milliessta.

19)' 校則が学生を縛っている。 *校則i 學生ul mwukkko issta.

20)' *apociuy 能力i ney sikkwulul maytalassta.

21)' 学生運動がA君を巻き込んだ。 *學生運動i A君ul hwimalassta.

22)' 相手選手の技がその選手を終始一貫押した。

*sangtay選手uy kilyangi ku選手lul 始終一貫 milessta.

これらの例文も、述語には「縛る／mwukkta, maytalta, 巻く／malta, 押す／milita」等のような動作動詞が用いられているが、KではXの行為・作用によってYが何らかの影響を被っているとは判断出来ず、XはYにとって単なる手段のニュアンスしか与えない。従って、KではXのYへの働き掛け性は考えにくく、Xに視点を与え能動文で表現出来ない。なぜなら、手段のニュアンスを持つ働き掛け性がないものを擬人化させ、Xにまるで意志があるように捉え、能動文で表現出来ないからであろう。一方、Jでは20)に限っては自動詞文であるため、最初から考察の対象にならないのに対し、19)21)22)はKとは違って、XのYへの働き掛け性が考えられるため、19)' 21)' 22)' のようにXに視点を与え能動文で表現することが可能である。これは、Xの働き掛け性があるかないかという認知上の問題においてJ K両語は異なっていることを示唆しており、JがKより擬人法を用いて表現する文がかなり広い範囲で使われていることを裏付けている証拠でもある。

4. 能動文への変換が特殊である場合

J K共に、話者の視点はYに置いて表現するのが一般的であるが、Xに視点を置いて表現することも可能であって、それはKにおいて特殊な場合に限る。一方、JにおいてはXに視点を置く能動文もmarked的な感じは与えない。ここでのXはYへの働き掛け性が考えられるもので、結局擬人化が可能である場合である。なお、XをマークするのはJでは「ニ」、KではXが無情物の時しか用いられない 'ey' に限られる。

4-1. Xが働き掛け性を持つ自然現象の物

23) 花子は土石流に呑まれた。 花子nun 土石流ey hwimalliessta.

24) 彼女は濃霧に包まれた。 kunyenun cithun ankayey hwipssaiessta.

25) 登山隊員らが雲に包まれた。 登山隊員tuli kwulumey hwipssaiessta.

26) 彼が竜巻に巻き込まれた。 kuka hoyoli palamey ppallie tulekassta.

27) 太郎は大雪に閉じ込められた。 太郎nun phokseley kathiessta.

23)' 土石流が花子を呑んだ。 ?土石流ka 花子lul hwimalassta.

24)' 濃霧が彼女を包んだ。 ?cithun ankayka kunyelul hwipssassta.

25)' 雲が登山隊員らを包んだ。 ?kwulumi 登山隊員tulul hwipssassta.

26)' 竜巻が彼を巻き込んだ。 ?hoyoli palami kulul ppala tulyessta.

27)' 大雪が太郎を閉じ込めた。 ?phokseli 太郎lul katwuessta.

これらの例文は、J K共にYに視点を置く受動文が多く用いられるが、Xに視点を置く能動文も非文ではない。それは、述語が動作動詞であり、Xの行為・作用によってYが何らかの影響を被っていると判断出来るため、XのYへの働き掛け性が考えられ、Xに視点を与え擬人化した表現が可能であるからであろう。この点で、J Kは基本的に一致しているが、JがKより擬人化の範囲が広く感じられる。つまり、Jでは能動文自体がmarked的な感じを与えないのに対し、Kでは何れの能動文も特殊な文脈が必要であるため、特殊な感じを与えると共に、書き言葉に限って用いられる。

しかし、KではYが3人称ではなく1人称であれば、Xに共感性を与え易くなるため、Xに視点を置きやすく、Xを主語とする擬人化した能動文も特殊な感じを与えない。

23)" 土石流が私を呑んだ。 土石流ka nalul hwimalassta.

24)" 濃霧が私を包んだ。 cithun ankayka nalul hwipssassta.

25)" 雲が私を包んだ。 kwulumi nalul hwipssassta.

26)" 竜巻が私を巻き込んだ。 hoyoli palami nalul ppala tulyessta.

27)" 大雪が私を閉じ込めた。 phokseli nalul katwuessta.

一方、JではYが3人称の時にしろ1人称の時にしろ、能動文への変換は可能である。

4-2. Xが働き掛け性を持つ原因・理由

28)花子は強迫観念に襲われた。 花子nun 強迫観念ey salocaphiessta.

29)彼は好奇心に駆り立てられた。 kunun 好奇心ey salocaphiessta.

30)彼らは不安に襲われた。 kutulun 不安ey hwipssaiessta.

31)太郎は罪の意識にさいなまれた。 太郎nun 罪意識ey tulpokkiessta.

32)彼は借金に苦しめられた。 kunun pichey tulpokkiessta.

28)' 強迫観念が花子を襲った。 ?強迫観念i 花子lul salocapassta.

29)' 好奇心が彼を駆り立てた。 ?好奇心i kulul salocapassta.

30)' 不安が彼らを襲った。 ?不安i kutulul hwipssassta.

31)' 罪の意識が太郎を苛んだ。 ?罪意識i 太郎lul tulpokkassta.

32)' 借金が彼を苦しめた。 ?pichi kulul tulpokkassta.

このような例文も、J K共に受動文が一般的であるが、能動文も多く用いられる。それは、述語が動作動詞であり、Xの作用によってYが何らかの精神的な影響を被っていると判断出来るため、XのYへの働き掛け性が考えられ、Xに視点を与え擬人化した表現が可能であるからであろう。この点でJ Kは基本的に一致しているが、JがKより擬人化の範囲が広く感じられる。つまり、Jでは能動文自体がmarked的な感じを与えないのに対し、

Kでは何れの能動文も特殊な文脈が必要であるため、書き言葉に限って用いられる。

しかし、KではYが3人称ではなく1人称であれば、Xに共感性を与え易くなるため、Xに視点を置きやすく、Xを主語とする擬人化した能動文も特殊な感じを与えない。

28) ” 強迫観念が私を襲った。 強迫観念i nalul salocapassta.

29) ” 好奇心が私を駆り立てた。 好奇心i nalul salocapassta.

31) ” 不安が私を襲った。 不安i nalul hwipssassta.

31) ” 罪の意識が私を苛んだ。 罪意識i nalul tulpokkassta.

32) ” 借金が私を苦しめた。 pichi nalul tulpokkassta.

一方、JではYが3人称の時にしろ1人称の時にしろ、能動文への変換は可能である。

5. 能動文への変換が可能である場合

J K共に、Yに視点を置いて受動文で表現しても、Xに視点を置いて能動文で表現しても可能であり、視点の移動に制限がなく、能動文への変換は自由である。また、XのYへの働き掛け性が考えられるため、擬人化が可能である。なお、XをマークするのはJでは「二」に限らず、「ニヨッテ」も「カラ」も用いられており、KではXが無情物の時しか用いられない‘ey’に限らず、‘ey uyhay’ ‘lo pwuthe’も用いられている。

5-1. Xが働き掛け性を持つ原因・理由：XがYに精神的な影響を与えている。

33) 彼女は彼の忠告に心を動かされた。 kunyenun kuuy忠告ey maumi huntulliessta.

34) 彼は彼女の愛情に束縛された。 kunun kunyeuy 愛情ey 束縛tanghayssta.

35) 彼が村人の暖かい人情に捉まえられた。

kuka maulsalamtuluy ttattushan 人情ey puthcaphiessta.

36) 人々は美しい旋律に魅了された。 salamtuli aluntawun 旋律ey kkulliessta.

37) 二人の会話は騒音で遮られた。 twusalamuy 会話nun 騒音ulo 遮断toyessta.

33)’彼の忠告が彼女の心を動かした。

kuuy 忠告ka kunyeuy maumul huntule nohassta.

34)’彼女の愛情が彼を束縛した。 kunyeuy 愛情i kulul 束縛hayssta.

35)’村人の暖かい人情が彼を捉まえた。

maulsalamtuluy ttattushan 人情i kulul puthcapassta.

36)’美しい旋律が人々を魅了した。 aluntawun 旋律i salamtulul 魅了sikhyessta.

37)’騒音が二人の会話を遮った。 騒音i twusalamuy 会話lul 遮断sikhyessta.

これらの例文は、J K共にXがYに“精神的な影響を与える存在”であるため、XのYへの働き掛け性が考えられる。それは、Xの行為・作用によってYが何らかの精神的な影響を被っていると判断出来ることから説明出来よう。従って、このようなXにはJ K共に話者の共感を寄せやすいので、Xに視点を置いてXを主語とする能動文も可能である。この時、Kにおいて4-2と違うのは、Xが具体性を持つ抽象名詞であることと、述語動

詞が4-2程Xの行為性を強力的に示すことができない動作動詞であることである。

5-2. Xが働き掛け性を持つ材料・道具

38)アメリカ大統領がタイム紙から批判された。

美國大統領i thaimcilopwuthe 批判patassta.

39)多くの市民がそのパンフレットに刺激された。

swumanhun 市民i ku phamphullesey 刺激patassta.

40)彼らは宗教によって救われた。 kutulun 宗教eyuyhay 救援patassta.

41)青少年達が成人ビデオに刺激された。 青少年tuli 成人pitioey 刺激patassta.

42)彼女が新聞に詳しく紹介された。 kunyeka 新聞ey caseyhi 紹介toyessta.

38)'タイム紙がアメリカ大統領を批判した。 thaimcika 米国大統領ul 批判hayssta.

39)'そのパンフレットが多くの市民を刺激した。

ku phamphullesi swumanhun 市民ul 刺激hayssta.

40)'宗教が彼らを救った。 宗教ka kutulul kwuhayssta.

41)'成人ビデオが青少年たちを刺激した。 成人pitioka 青少年tulul 刺激hayssta.

42)'新聞が彼女を詳しく紹介した。 新聞i kunyelul caseyhi 紹介hayssta.

これらの例文において用いられているXは、J K共に人間の生活をより豊かに営むための公共性を持つ材料・道具であり、Yへの働き掛け性が強く認識出来るため、行為者並みの機能を果たしていると考えられる。それは、Xの行為・作用によってYが何らかの影響を被っていることから説明出来る。従って、J K共にYからXへ視点を移動させ、能動文で表現することが可能である。

5-3. Xが働き掛け性を持つ集団・団体の場所

43)太郎は会社から辞職を強要された。太郎nun 会社lopwuthe 辞職ul 強要tanghassta.

44)彼女は文化界から注目された。 kunyenun 文化界lopwuthe 注目patassta.

45)彼は党によって監視された。 kunun 党ulopwuthe 監視tanghayssta.

46)二人は新聞社から派遣された。 twusalamun 新聞社eyse 派遣toyessta.

47)彼はそのグループから除外された。 kunun kumoimeyse 除外toyessta.

43)'会社が太郎の辞職を強要した。 会社ka 太郎uy 辞職ul 強要hayssta.

44)'文化界が彼女を注目した。 文化界ka kunyelul 注目hayssta.

45)'党が彼を監視した。 党i kulul 監視hayssta.

46)'新聞社が二人を派遣した。 新聞社ka twusalamul 派遣hayssta.

47)'そのグループが彼を除外した。 kumoimi kulul 除外hayssta.

これらの例文も、Xは人間の集まりで構成される集団・団体として、Xの行為・作用によってYが何らかの影響を被っているため、XのYへの働き掛け性が十分認識出来る存在であり、行為者並みの機能を果たしていると考えられる。従って、J K共にXが無情物であってもYからXへ視点を移動させ、能動文で表現することが可能である。

5-4. Xが働き掛け性を持つ手段：Xが人間の行動を前提とする手段である。

48)彼女の幸福は戦争によって破壊された。

kunyeuy 幸福un 戦争eyuyhay 破壊tanghayssta.

49)彼は維新によって救われた。 kunun 維新eyuyhay 救済toyessta.

50)彼は教育によって価値観が変えられた。 kunun 教育eyuyhay 価値観i pakkwiessta.

51)彼らは敵の氣勢に圧倒された。 kutulun 敵uy氣勢ey 圧倒toyessta.

48)'戦争が彼女の幸福を破壊した。 戦争i kunyeuy 幸福ul 破壊hayssta.

49)'維新が彼を救った。 維新i kulul 救済hayssta.

50)'教育が彼の価値観を変えた。 教育i kuuy 価値観ul pakkwue nohassta.

51)'敵の氣勢が彼らを圧倒した。 敵uy 氣勢ka kutulul 圧倒hayssta

これらの例文のXは“人間の行動を前提とするもの”として、Xの行為・作用によってYが何らかの影響を被っているため、XのYへの働き掛け性が十分認識出来ると共に、Xは行為者並みの役割を果たしていると考えられる。従って、J K共にXは無情物であっても、Xに視点を置いて能動文で表現することが可能である。

6. 終わりに

以上のことを表として纏めてみると、次の通りである。

| Xは | Xの性質（働き） | 能動文への変換有無 | |
|------------------|--|--|---|
| | | 日本語 | 韓国語 |
| Yへの働き掛け性を持っていない。 | (1)原因・理由を表す (2)材料・道具を表す (3)場所を表す (4)手段を表す | 不可能 不可能 可能 ¹⁾ 可能 ²⁾ | 不可能 不可能 不可能 不可能 |
| Yへの働き掛け性を持っている。 | (1)自然現象の物である (2)原因・理由を表す (3)材料・道具を表す (4)場所性を持つ集団・団体 (5)手段を表す | 可能 可能 可能 可能 可能 | 特殊 ³⁾ 特殊 ⁴⁾ 又は可能 可能 可能 可能 |

最後に、これまでのことを踏まえた上で、J K両語の類似点と相違点を示せば、(1)(2)のような類似点と(3)(4)のような相違点が見られる。

(1) J K共にXのYへの働き掛け性があれば、基本的に能動文への変換は可能である。

(2) J K共にXのYへの働き掛け性がないと、基本的に能動文への変換は不可能である。

(3) Jでは、XのYへの働き掛け性があれば、能動文への変換はすべて可能であるが、KではXのYへの働き掛け性があっても、Xが自然現象の物や原因・理由を表わすものの中でもXが具体性を持たない抽象名詞であったり、述語動詞がXの行為性を強力的に示すことが出来る動作動詞が用いられている場合であれば、Xに視点を与え能動文で表現するとXの意志性が前面に出てくるため、特殊な文脈を必要とする特殊な言い方になる。

(4) Xが場所か手段を表わすものとして、KにおいてはXのYへの働き掛け性が考えにくい場合でも、JではXのYへの働き掛け性があると認識している場合もあって、その時のJの受動文は能動文への変換が可能である。

以上のことから、JはKより無情物XのYへの働き掛け性があると捉える尺度が広く、擬人化の範囲も広いことがうかがわれる。したがって、Jの受動文はXが無情物であっても、Yへの働き掛け性があると判断出来るものはYからXへ視点を移動させ、擬人法を用いて能動文で表現することが可能である。これは、XのYへの働き掛け性があるかないかという認知上の問題において、J Kが異なっていることを示唆するものであり、JがKより擬人法を用いて表現する文がかなり広い範囲で使われていることを裏付けている証拠でもある。これはまた、Jの受動文がKの受動文より、ヴォイスの基本的な機能（受動文は基本的に対応する能動文が存在する）をしっかりと持っている証拠でもあると言えよう。

(広島大学大学院)

<注>

- 1) Jでは、XのYへの働き掛け性があると十分認識できる。
- 2) Jでは、XのYへの働き掛け性があると十分認識できる。
- 3) 但し、KではYが1人称の時は可能である。
- 4) 但し、KではYが1人称の時は可能である。

<主要参考文献>

井上和子編、1989『日本文法小辞典』大修館書店

奥津敬一郎、1983「何故受身かー〈視点〉からのケース・スタディー」『国語学』132
国語学会

奥津敬一郎、1992「日本語受身文と視点」『日本語学』8月号vol.11明治書院

金水 敏、1992「場面と視点ー受身文を中心にー」『日本語学』8月号vol.11明治書院

金敏洙、1971『國語文法論』一潮閣

久野 暲、1978『談話の文法』大修館書店

藤井 正、1986「視点について」『築島裕博士 還暦記念 国語学論集』明治書院

Shibatani, M. 1985 "Passives and Related Constructions :A Prototype Analysis"
Language 61 821~848